

六 花

月刊俳句雑誌りっか
chairman yamada rokko
secondary chairman &
the editor in chief kotori
designed by little bird

8月号

2008

山田六甲

め まとひを払ひつ 賽銭さいせん 投げにけり
ぐ ぐじゅぐじゅと線香花火の玉落ちず
り 力みたる文字の七夕たなばたかざり飾かな
あ 淡雲あわぐもに溶けゆく合歡ねむの花の色
ひ 紐解いて消えてゆけよと兜虫かぶとむし
て 照返てりかえし入れつつ日傘進みけり
み 水嵩みずかさのにはかに増えし鮎あゆの川
し しみじみと出たる腹なり暑気しよき中あたり
や 灼やけぬたる門かどに水打ちぬたりけり

そ 外海に台風の余波よ確かなり
れ 冷麺の錦糸卵きんしたまごを仕上げをり
と 遠花火近づく道の閉ざさるる
も 藻の流れ着きたる浜の花火かな
わ 輪を蹴つて新たなる輪をあめんぼう
か 帰り来し花火の匂ひともなひて
ぬ ぬきん出しものは供そなへず盆飾ぼんかざり
ま まじまじと雲のさけめの銀河ぎんが見る
に 二の腕に日焼けと齒形残りけり
く 雲の峰立ち始めたる夕べかな

ことり

め 目の色の薄くなりけり生御霊いきみたま
ぐ 茱萸ぐぐみの実の乾涸ひからびてをり原爆忌
り 龍胆りんとうの蓄つぼみ固きを求め来し
あ 甘酒に氷浮かべて飲みにけり
ひ 冷酒の水滴もてあそびたる指
て 手に重み確かめ葡萄ぶどう摘みにけり
み 身の内の全てを声に蝉時雨
し 白々と暮れてゆくなり夏の夕
や 薬罐やかんごと卓に置きたる麦茶かな

そ それぞれの光消し合ひ天の川

れ 例題を解けず泣く子よ夏休

と 問ひ質^{ただ}すやうに短冊星祭

も 桃の皮爪の先もて剥^むきにけり

わ 輪を浜に爪^{つま}先^{さき}で描く夜の秋

か 掻き回すストローに音ソーダ水

ぬ ぬるま湯に脚を伸ばせる夜の秋

ま 薪^{まき}積まれ朽^くちたる中に露草が

に 肉厚の果実集めて原爆忌

く 蜘蛛^{くも}の罿^いに捕らへられしは雨滴^{うてき}のみ

乗込や飛沫の縦に立つ水面 筒井八重子

葉桜や広場に弾む子らの声

宅配を開かば蜜柑の花のあり

雨音に激しく若葉打たれをり

柿若葉風に光を放ちけり

のっこみやしぶぎのたてにたつみなも つついやえこ

「飛沫の縦に」という実写が生き生きと乗込の瞬間を捉えている。普通ならば飛沫を飛ばしとか飛沫激しくとか言うところを「縦に」という表現によつて一層春の魚の交尾行動の激しさが表れた。乗込みとは産卵や交尾のため魚が沼や池の岸近くに寄ってくることに。その魚の行動を辛抱強く観察して一句をものにしたのである。柿若葉の句も「風に」が佳い。

雨蛙

貝森

光洋

縄電車縄になりゆく臃かな
 目高群れなかなか夕陽沈まれず
 墓蛙 苦しき時の疣頼み
 雨降り泣く子と雨蛙には勝てず
 雨がえる足の先まで駄々こねて

定家かづら

笹村

政子

突堤も橋も孤を描く卯月かな
 薫風や神鈴小さき音のして
 芍薬の蕾にしかと色現れぬ
 捨苗のみどり濃かりきひとと
 樹の形に定家かづらの咲きのぼる

足跡

三井 孝子

花屑はなくずに足跡付けて行きにけり
 耳取れし林檎りんごのうさぎ花筵はなむしろ
 おとうとのをらぬ指吸ふ端午たんごかな
 代搔しろかくや地図ちずのごとくに土の浮く
 葉桜はなざくらや夫つまに手渡すりフト券

薰風くんぷう

水谷ひさ江

記念樹の名札取りかへる端午
 うねるたび鱗うろこをとばす鯉こいのぼり
 弟あにの生なれて淋しみし鯉こいのぼり
 走り茶ちやに湯吞ゆすりて湯をさます
 薰風の埴輪はじりの耳を抜けにけり

せつ じゅう しゅう
雪 樹 集

八十八夜

山本ミツ子

水張つて八十八夜を待つ田かな
時計草くるりと木の葉廻しけり
青梅をさがす眼まなこの疲れけり
でこぼこの薬缶やかんを溢る石清いwashimizu水
水芸の扇涼しく水を受く

錦 鯉

池崎るり子

錦鯉紅白の背な極きわめけり
水槽すいそうの金魚飛び出る水の音
霧雨に揺らぐ紫陽花うすみどり
廻り道足許あ悪しく梅雨兆す
夏なつあざみ薊あざみ挺身隊の写真あ褪あせ

六花集

六甲選

久永
つう

花冷や熱き茶と合ふ菓子を買ふ

春雨に肩濡らしゆくもやひ傘

曲りては続く坂道うららけし

げんげ道ゆく長閑さのど真ん中

花祭代はる代はるに杓の音

松本
蓉子

つかつかと畑へ芍薬剪りにゆく

つややかに手のひらにある蛭かな

心地よく水に透けたる蛭かな

一粒に蛭の重み確かなり

残る鴨身をくねらせて餌をとれり